



今日のニュース

[長野県内](#)

[国内外](#)

[経済](#)

ダイジェスト

[全県](#)

[地域](#)

[スポーツ](#)

[国内](#)

[国際](#)

社説・コラム

[今日のニッポン\(39紙\)](#)

[列島ニュースAREA21](#)

[リンクNAGANO21](#)

[山小屋ネット](#)

[花だより](#)

[信州そば漫遊](#)

[信州歳時記](#)

[イベントガイド](#)

[市町村の話題](#)

[写真グラフ](#)

[就職ガイダンス](#)

[信濃毎日新聞社](#)

[信毎の本](#)

[購読案内](#)

[広告案内](#)

8月15日(月)

社説 = 終戦の日(下) 「なぜ」を問うことから

詩人の茨木のり子さんに「知らないことが」という作品がある。

過酷な戦争体験のある同世代の青年との出会いをつづったものだ。戦場での恐怖による神経系の疾患を抱えながら、前向きに暮らしている若者に対して、詩はこう語りかける。

「精密な受信器はふえてゆくばかりなのに / 世界のできごとは一日でわかるのに / “知らないことが多すぎる” と / あなたにだけは告げてみたい」

茨木さんは一九二六年の生まれだ。同じ戦争の時代を経験しても、自分はその恐ろしさや痛みをどれほど知っているのか。詩には作者のそういう思いが込められている。

< 針路誤らないために >

敗戦から六十年。中国では抗日戦争勝利から六十年にあたる。韓国では八月十五日を「光復節」と呼ぶ。日本の植民地支配から解放された日と位置付けられている。

戦争のことは知らないでは済まされない。茨木さんの詩のように「知らないことが多すぎる」と、自分にも、隣国の人々にも、素直に認めることから始めたい。

それに戦争は過去のことではない。イラクでは毎日のように多くの市民が死んでいる。そこでは自衛隊が活動している。若者た

ちがいつ戦争に巻き込まれるか、分からない世の中になってきた。

戦争の歴史を学ぶのは、中国や韓国と仲良くするためだけではない。日本の針路を誤らないために、欠かせない営みである。

では、どうやって学び、伝えていったらいいのか。三つの提案をしたいと思う。

一つは、歴史の「なぜ」を大切にすることである。

<身近な史料によって>

なぜ日本はアジアの近隣諸国に多大の犠牲者を出す戦争を起こしてしまったのか。なぜ青年たちは「お国のために」と銃を取り、戦場へと向かったのか。

子どもも大人も、ともに「なぜ」と問い掛け、自分たちの力で「なぜ」を解いてみたい。

教科書や歴史書が手引になるのはもちろんだが、素材は身近にある。地域の歴史から学ぶこと、これが二つ目の提案である。

戦争を体験したお年寄りに話を聞くのもいいだろう。オーラルヒストリー（聞き取りによる歴史記述）は近年、大きな注目を集めている手法である。丹念な聞き取りを報告集にまとめている飯田下伊那地方の「満蒙（まんもう）開拓を語りつくす会」の活動は、好例といえる。

戦争の史跡を調べることも一案だ。長野県内には近代史を考える上で貴重な史料や史跡が多い。その気になれば題材はいくらもある。

例えば、松本市には旧開智学校がある。資料室には明治、大正、昭和の教育史料などが約九万点保存されている。その中から、戦前の教科書を見てみよう。

一九四二（昭和十七）年の「初等科国語二」には、「三勇士」の話が載っている。三人の兵士が爆弾を抱えて敵陣に突撃し、戦

死する物語だ。「天皇陛下万歳」と言って、「静かに目をつぶりました」で終わっている。

当時は道徳教育として「修身」の授業があった。教師用の修身の指導書には「天皇陛下の御為には、一身を顧みず忠義を盡(つく)すべきことを教える」(一九三五年発行)とある。戦争と教育の深いかわりを示す史料である。中学、高校の授業でも生きた教材になるはずだ。

< 視野を広く持って >

長野市の長野俊英高校の郷土研究班は松代大本営地下壕(ごう)の調査を続けて二十年になる。

大戦末期、本土決戦に備えて掘られた地下壕である。天皇御座所や大本営などを移す計画だった。朝鮮半島から強制連行された人や自主渡航の労働者が数千人規模で動員されたといわれている。

現在教頭をしている土屋光男さんが、生徒たちとともに、在日の元労働者や地元の人たちなどから丹念に聞き取り調査を続けてきた。いまでは生徒たちが、県内外から訪れる中学生や高校生などにガイド役も買って出る。

班長の石原崇さんは、松代を強制連行の「加害の地」としてのみとらえてはいない。例えば、朝鮮人労働者と地元の人たちとの交流もあったことを知り、「戦争遺跡の見方は決して一つではない」と考えるようになったという。

「価値観を押しつけるのではなく、事実を調べることで生徒たち自身が考える」。土屋さんの方針は、教育の場での歴史研究の在り方に一つのヒントとなるだろう。

最後にもう一つ、どうしてもはずせないことがある。次の世代、次の時代に引き継ぐべき歴史とは何かを常に考えることだ。

先の戦争については国の内外で歴史認識の分裂が深刻になっている。難しい作業だが、歴史をつかみ直し共有する不断の努力が

必要だ。

八月十五日。戦争体験者の話に耳を傾け、身近な史跡を訪ねてみよう。そこから出発しながら、どの国の人々にも通じる平和や非核の理念へと結晶させたい。

掲載中の記事・写真・イラストの無断転用を禁じます。
Copyright 2005 信濃毎日新聞 The Shinano Mainichi Shimbun